

APNIC56 参加報告書

慶應義塾大学 大谷 亘

October 4, 2023

1 概要

本稿では、JPNIC による国際会議参加支援プログラムを利用して APNIC56 Conference (日本・京都) に参加した件について、「参加セッションと概要」「参加した所感」「今後の展望」の 3 点にわけて報告する。APNIC56 では開催 3 日間全日を通してセッションに参加した。今後は学んだことを所属コミュニティに持ち帰り、築いたネットワークを有効に活用していきたい。

2 参加セッションと概要

本会議においては、以下のセッションに参加した。

1 日目

- Newcomers welcome
- Opening Ceremony and Keynotes
- Technical 1
- Technical 2
- Welcome social

2 日目

- Technical 4 - JANOG
- APNIC/FIRST/APCERT

- Lightning Talks
- Meet the EC Cocktail

3 日目

- APNIC By-laws Reform
- Open Policy Meeting 1
- Open Policy Meeting 2
- APNIC Member Meeting 1
- APNIC Member Meeting 2
- Closing Social

以下、この中で特に注目したセッションについて概要を記す。

2.1 Opening Ceremony and Keynotes – Public Core Internet

本セッションにおいては、特に村井純氏のキーノートに注目した。キーノートの中で、様々なコミュニティのリーダーたちと考えた発信すべきメッセージとして Public Core Internet の概念が提唱された。これはインターネットを公共政策やデジタルデータインテリジェンスのコアとして据える概念である。建て付けとして 6 層のレイヤリング構造を採用しており、上から順に

- Policy
- Norms and Rules
- Data
- Platforms [World Wide Web]
- 5G and Domestic (or Regional) Infrastructure
- Internet and Global Infrastructure [IP + Routing]

となっている。このうち、第 1 層と第 3 層をあわせて Public Core であると定義している。また、それぞれのレイヤ内は各国で異なる (特に Policy や Norms and Rules) ものの、根本的なレイヤ構造は各国共通であるべきだとし、インターネット及び Web をこの共通の Public Core として各国が捉えることで、インターナショナルの観点においてもグローバルな枠組みを使ってデジタルデータやインテリジェンスのやりとりをより活発化できるとした。

2.2 Technical 2 – Goodbye TCP

本セッションにおいては、特に Geoff Huston 氏の「Goodbye TCP」に注目した。本講演の主な提言は「TCP は QUIC にとって代わられるであろう」ということであり、それ自体は QUIC の提唱当初から謳われていることではあったが、トランスポート層としての役割に着目している点と、その上で論理的に QUIC が普及するであろう理由が語られている点が印象に残った。特に、下のレイヤの技術を置き換える例として IPv6 との比較が行われていたが、IPv6 はコンテンツプロバイダやネットワーク事業者に対して導入コストに対するインセンティブが薄く、対して QUIC は特にコンテンツプロバイダに対して大きなインセンティブがあるとしており、納得させられるものがあつた。また、私の専門である DNS では、ネットワークの高速化によりその意味が薄れた現在でも TCP ではなく UDP が主流という状況であり、他にも会場の参加者から「SMTP が SMTP over QUIC になると本当に思

うか?」という趣旨の質問があったが、それについても「DNS ですら DNS over QUIC が普及し始めているのでおかしいことではない」としており、私にとっては特にこれからの DNS プロトコル拡張における権威サーバ - リゾルバ間のトランスポートプロトコルのあり方について大きく考えさせられるものだった。

2.3 Technical 4 - JANOG

本セッションにおいては、特に以下 2 つの講演に注目した。

2.3.1 JANOG52 NW Team BAKUCHIKU - Overview of Network Construction

本講演では、1 月に長崎で開催された JANOG meeting 52 での会場ネットワークインフラの構築について紹介された。特に学生主体で ASN をもってイベントネットワークを構築しているのは、同じく学生である自分自身にとってとても興味深い内容であり、エンジニアやイベントネットワーク構築・運用の経験から問題解決の着目点など勉強になることが多かった。

2.3.2 Next-generation secure public Wi-Fi supporting the digital society and eduroam/OpenRaming combined deployment in Cityroam

本公演では eduroam や cityroam の取り組みをベースとした OpenRoaming に関する展望について説明があった。特に LTE が普及し人口カバー率が非常に高い日本にとって Public Wi-Fi の立ち位置は他国と大きく異なると考えられるが、非常時・災害時などの活用への利点、普段から活用することへのモチベーションなどについて質疑を通して詳しく学ぶことができた。

3 参加した所感

セッションに限らず本プログラム全体を通じた所感を記す。

3.1 国内参加者との交流

本会議は国内開催ということもあり、日本人参加者が非常に多かった。そのため、他の国際会議では主に国外の方とのやりとりが多くなるが、今回は国内参加者との日本語での交

流の割合が多かった。同じ国内からでも自分と同じような問題意識を持っていたり価値観を共有できるような多くの方々と知り合うことができ、自分のネットワークの広がりを感じた。また、フェロー同士の交流も活発に行うことができ、今回に限らず継続的に交流し情報交換していくこととなった。

3.2 RIR でのポリシー形成への理解

ICANN ミーティングなどに参加することでグローバルでのポリシー形成について学びを深めていたが、今回の参加でリージョナルな場でも同様なプロセスでポリシー形成が行われることが理解できた。また、自分が所属するリージョンでのポリシー形成の場に立ちあい、参加することができた。さらに、自分が理解した内容を所属するコミュニティに持ち帰り説明することで、今までインターネットでのポリシー形成に目が向いていなかった方々にもアプローチすることができたと思う。

4 今後の展望

今後の展望として、まずは RIR/APNIC のカンファレンスにてどのようなことができるのか・得られるのかを持ち帰り、本報告書をもととして自分のいるコミュニティにて報告したい。これは特に技術屋が多いコミュニティでは新鮮な話題も多いと考えられ、かつ技術屋でもこのような会合に参加する意味を見いだせたということは強調しておきたい。また、実際に参加して学んだコンセンサスメイキングなどの手法を取り入れ、コミュニティ運用をさらに円滑に、より良いものにしたい。最後に、この機会を得たネットワークについて、インターネットガバナンスの視点ではもちろん、普段の学業などでも有効活用し、継続的に広げていけるよう密に連絡を取り合っていきたい。

謝辞 現地でサポートしてくださった JPNIC の前村昌紀氏、川端宏生氏、五島健太郎氏、中川香基氏、プログラムを調整いただいたフェローシッププログラム事務局の皆様、一緒に議論してくださったフェローの皆様、本プログラムにご協賛いただいた皆様、その他現地にて貴重な意見交換や議論をしてくださった皆様に感謝申し上げます。